

ドーデの南仏と南仏人

——その病氣について——

加藤 林 太 郎

I

「ジャック」は、私の作品の中で、群を抜いて最も長く、かつ最も速く書き進んだものであった。(4)とドーデは言っている。そうなる原因はいくつもあつたろう。遺棄恐怖と不適應の症例のような主人公の短い生涯、不満がほとんど唯一の情熱とも思える失意の芸術家たち、この男たちの悪意に満ちた迫害を蒙る虚弱な少年、愛欲に捉われると直ちに母親としての保護能力を忘れ去る、小鳥のような心の女、など、この作品に含まれるドーデ的な要素の数は多いからである。だが、何よりもこの作品が「吊鐘のような咳」を響かせながらドーデの前に現われた病身の一青年をモデルとし、絶望の挙句慈善病院において肉親から見捨てられて病死する主人公の最後が象徴するような病苦の物語である点にこそ、作者が筆を速かに進め得た原因があるのではないか。ドーデの作品には自殺者と並んで病死者も甚だ多いといわねばならない。〈病氣〉は彼の作中人物たちの無視できない要素である。主人公たちの努力あるいは単に

労苦は、彼らの精神に影響を及ぼすとともに、否むしろより確実に彼らの身体に影響を及ぼす。家への仕送りを一手に引き受け、世話の焼けるプチ・ショーズたる弟に、より良い人生の一頁をめくらせてやろうと苦勞した兄のジャックは、急性肺炎を發して死亡する。主人公ダニエルにおいても、努力、労苦の結果は何を措いても病氣である。ダニエルが自習教師として苦勞しながら猛勉強に取り組んだ時、および不名誉な愛欲生活から立ち直った矢先、最愛の兄を失った時である。「川船物語」のヴィクトール少年も、重病に陥ることによって、無理で不自然な学校生活から解放され、結婚が待っている楽しい船の生活に戻って来る。愛する〈黒い眼〉に看病してもらえぬダニエルも、病室でクララと二人きりになれるヴィクトールも、自分の病氣に感謝することもあるほど彼らの人生には病氣が明暗ともに關係が深い。ドーデの作品においては、人生において成功を見る主人公たちも、身体的苦痛を経た後でなければ幸福に達することは無いといわれる理由である。⁽⁵⁾

これらの少年主人公達の病氣も、ドーデの作品において病氣の占める位置をうかがわせはするが、他にも様々の原因からドーデは作中人物を病者とする。病氣は程度の高い洗練の一種として主人公の美質の一つに加えられるのではないかともいわれる。⁽⁶⁾ 義兄ニユマ・ルメスタンの故郷の南仏の祭に熱狂する澆刺とした美しいパリ娘であったオルタンスは、湯治場で慧眼の老医師から病氣の重大さを見抜かれる。やがて彼女は自分の夢を裏切る愚かしい現実と悪意のために病勢を急激に悪化させて世を去る。初恋に破れて自殺を計った後病死するデジレ・ドロベル（「若いフロモンと兄リスレル」）、あるいは英雄模倣家タルタランを秘かに慕う医師トゥルナトワールの病身の娘（「アルプスのタルタラン」「タラスコン港」）さえも、洗練あるいは清純の属性を示して病弱なのであろうと思われる。彼女達もまた伝統的な病める美女達なのであろう。⁽⁷⁾

高貴の身分にあることも、ドーデの作品においては、やや通俗性を反映しはするが、やはり病者として描かれる原

因となるように思われる。最高の身分も、無邪気なエゴイズムも死の前では無力であることを知って涙にくれる王太子（「王太子の死」、亡命の王家の王政復古という大事業の夢をつなぐには余りにも虚弱なイリリヤの王太子（「亡命の王達」）など、文武両道に秀でた巨人たるラブレエの王太子たちの逆の極端をこれらの貴公子たちは示しているといつてもよいであろう。叙勲請願のためパリへ出て身心をすり減らしている一介の將軍アガでさえもアルジェリアに病弱な息子を残している。「それから將軍の息子、熱を出している青白い顔の美少年で、黒い外とうにくるまって長椅子の上に休んでいる。二頭の大きな猟犬が足下にいる。私たちが部屋に入っても何も動かない。ただわずかに、猟犬の一頭が頭をゆすぶり、息子が私たちの方へ熱ばんだ疲れ切った美しい黒い目を向けてくれただけだ。」⁽⁶⁾（「八月十五日の叙勲者」）もちろん身分の高位のみが病者として描かれるにふさわしい条件の全てではない。ドーデの作品にあたかも〈人物再登場〉的に何度も姿を現わし、彼の作中人物中ほとんど最高位にある名医ブシュローが、自らも悪性遺伝の心臓肥大症に冒され、死を宣告されたに等しい身体でありながら、自分よりも軽い病人を診察している姿は決して滑稽、皮肉を目的として描かれてはいるわけではないのである。これらは病弱などという肉体上の標で精神上の高貴を示す一般的傾向に恐らくは多分に則つてであろうけれども。

またこのことは逆の側からの証明も可能かも知れない。タルタランのように船酔いなどにはかからず、彼の財布を持ち逃げするまでは、沙漠の冒険においてマントールの役目を果たしてくれる実に元氣なモンテ・ネグロのプリンスがにせ王子であることもそうであるが、寸づまりの知性と虚栄心から出来ているタルタランが、労働者も一目置く〈二重筋肉〉の持主であり、成金銀行家エメルラングが巨大肥満の背中での人の通行を妨げたりする（「ナバブ」）のはピトレスクな非高貴性であるにはちがいない。

さらに子供も、彼の作品にあつては〈病者〉であることによって登場人物となるといつても言い過ぎにはならない

であろう。病弱の幼い王太子たちは、従つて二重の標示を担っているのではないだろうか。(ヘクトレム哺育院)での自称博愛的育児実験に供せられ、次々と栄養失調症で死んで行く哀れな赤ん坊たちの「嬰兒虐殺」的場面によらずとも、ドーデの作品に気の毒な病児の姿を求めることはたやすい。毒舌の評論でパリを恐れさせるとともにパリを喜ばせて来たビクシューは、彼の破綻に先立ち、既に娘の病弱に悩む父であった。「あの娘もやはり僕には有難い人間だったよ！生まれてまだ九年も経たないうちに、もう罹らない病気はないという有様だった。」⁽⁶⁾そして彼の紙入れには「ジフテリア、痙攣、猩紅熱、麻疹など、さまざまな小児病のための古びた処方書き」が未だに残っている。サフオー即ちファニーが雇われている場末の安ホテルにも、作者はこのような病児の一人を描きこむことを忘れなかった。六弦琴奏者たる姉とともにドイツから出て来て、パリの音楽院でクラリネットを専攻していたレオ少年は、肺を患い、勉強を断念しなければならなくなった。ホテルの客間のささやかな演奏会で、姉が楽器を奏する時、「彼が奏であることを許されている唯一の楽器」即ち架空のクラリネットの上に指を走らせ、熱心に音楽のリズムに合わせて頭を振るこの少年。彼もドーデの作品に数多い病める子供達の一人として印象が強い。ドーデの全作品の中で「初旅初嘘」の連れ立って旅する陽気な二人の少年や、ファニーの連れ子で「野性の猫」のようなジョゼフと同じ元氣一杯の子供は他には見当たらないときえいわれる。その逆に「少し顔を見せるだけの場合も含めるなら、彼の作品中の病児の子供の例を網羅することはとうてい不可能なこと」なのである。⁽⁷⁾

「プチ・ショーズ」「川船物語」などの苦勞する少年の物語に病気が現れるのは、あるいは作者の回想的な感傷によるものであろう。また病む王太子たちには、不健康な環境などという、外的条件は欠けて抽象的な病気となっている。さらに彼の描く病気の子供たちは作者が相対性を無視して関心を抱いている描写対象とも考えられる。しかしそれだけに、いずれも作者にとっては抜きがたい〈病気〉のヴァリエーションであり、ドーデの作品には病気がほとん

ど必然のようにつきまとうことを示してはいるであろう。しかし、それはパリを描く作家となったドーデについての
み考えられる一傾向にすぎないということはないであろうか。「パリの霧の中や、またその泥の跳ねかえる都会の哀
愁の中にばかりいて、私は、おそらく、笑いの好みと能力とを失ってしまったかも知れない。けれど、タルタランを
読んでみると、私の心の裡にも、いくばくかの快活さが残っていて、それがあの南仏の美しい陽光に照らされ、突如
溢れ出たことに気づくのである。」⁽⁶⁾というが、病児たちの憂うつな群像の作者たるドーデは「笑いの好みと能力とを
失った」人であったのではないか。一方、釣合いの感覚を欠いた大言壮語を弄し、虚栄心に富み、好色で、饒舌の衰
えを知らぬ「南仏男の花」たるタルタランとその同類たちの作者としてのドーデは、その間一人の「冗談好き」に
戻るのであると考えられる。たしかにドーデの描く南仏人は全てがタルタランと同じではない。「人里離れた暮しを
永くしているために無口になり、話をする興味も失くし」た羊飼たちや放牧馬の番人たちのような寡黙な南仏人もあ
る。また時にはプロヴァンスにも真白な霜が降り、「北国の姿に変装」することもある。またこの南仏の土地が「ア
ルルの女」の小悲劇の舞台となることもあるであろう。だが少なくとも「プロヴァンスの美しき太陽」の下では病む
人はないのであろう。丘の風車に書齋を構えた作者は陽に輝く平原と、地平線のアルピュー連山を眺めて言う。「今
や私は、騒々しい黒ずんだ君たちのバリなんぞにどうして未練があるうか。私の風車小屋は快適至極！これこそまさ
に私の探し求めていた片隅である。新聞や辻馬車や霧から千里もへだたった、かぐわしく、暖かいささやかな一隅で
ある！」⁽⁶⁾

だがドーデの描く南仏は陽光と健康のメッセージばかりではない。「タンブーランや蟬とは少々変わった感じがす
る」ためには「ミリアナにて」の冒頭で作者の言うように「風車小屋から二、三百里離れたアルジュリヤ」へ行く必
要は必ずしもないのである。そのうえ彼の初期作品に見られるように幻想の形式に悲惨の描写を求める必要もまたな

いのである。全ては現実からの選択で足りるかと思える。サフォの愛人ジャン・ゴッサンの故郷は、ほとんど苦しむ農村の姿といってもよいであろう。母親は双子の妹たちを出産して以来廃人同様に床にいたままで暮し、一家の収入源であるぶどう園は、あぶら虫の害のため全滅の危機にあり、一房ごと一粒ごとの手入れを要し、様々の救済策が絶望的に試みられている状態である。また村の婆さんたちは彼に、ぶどうが枯れたことだけではない「茜草が尽きたこと、桑の病気など、この美しいプロヴァンスの国を荒廃させる打ち重なる災厄」について、いつも愚痴を聞かすであろう。南仏の不幸の中にドーデは病む南仏もまた描くことがあったと思わねばならない。「風車小屋便り」の全体に対して不調和をもたらすかに見える「いささかしめつばすぎる色合」の作品群は「私にはまだまだパリが近すぎます。毎日、家の松林まきばやしの中まで、パリはその悲しみの飛沫を私に跳ねかけてくるのです。」と作者が言うように、パリの不健全を反映した作品ばかりではないのである。

さらにドーデの描く南仏人たちは必ずしも居を南仏に定め、ここを離れない人々ばかりではない。北方への離郷者もまた彼の南仏人描写の中で無視しえない対象であると思われる。そして彼ら南仏離郷者たちの北方の風土と大都市パリへの不適応が往々にして病気という結果において描かれていることもまた無視できないことである。バイエルンで迎える降誕祭の夜、友の歌う南仏のクリスマス祝歌を聞きながら息を引きとる南仏出身の戦傷捕虜ベルナドゥは、離郷の南仏人の運命の一例にすぎないであろう（「サルヴェットとベルナドゥ」）。ドーデの描く〈病気〉および身体的苦痛には、南仏および南仏人におけるヴァリエーションが存在する。その性格を考察することが本論の目的である。

II

「アルルの女」の冒頭で、作者は悲劇の家の静けさを誇張し、ほとんど悲劇の聴覚化ともいべき描写を行っている。「なぜこの家に私の心は打たれたのだろうか？なぜこの閉された門柵が私の心を緊めつけるのだろうか？それは口では言えないが、とにかくこの建物は私をぞっとさせるのだった。周囲はあまりにも静まりかえっている……。通りかかっても、犬の吠え声があるでなし、ほろほろ鳥は啼声も立てずに逃げ去って行く。」⁹⁰背景と物語との〈交感〉という平凡な現象がここにはあるのだろう。しかしこれはまた、平凡な現実には詩の色を帯びさせる要因ともいえよう。そしてドーデの作品にあつては、しばしば登場人物と背景の間に調和が存在するのが見られると言う。ローヌ河をさかのぼる船で少年の「私」が知り合ったリヨンの女性が「霧夫人」と名乗るのは滑稽であろうが、作者はこの〈調和〉を常に滑稽的要素とするわけではない。

沙漠の中の街道を描写したかと思われる「二軒の旅籠屋」の導入部分もまた、この〈調和〉を求めたものである。だが、その〈調和〉は元からあつた方の宿屋の衰亡とそれを語る陰気な語り手との間により明かに存在する。「真新しい大きな建物で、活気に溢れ、景気がよい」向いの宿屋と「ひっそり閑としてまるで見捨てられたよう」なこの宿屋のビトレスクな対照は、実は人物の対比の反映に過ぎないかも知れない。向いの宿の主人であるアルル生まれの女は男好きのする派手な美女である。情夫は馭者であるから乗合馬車を女の所へ着ける。宿の女たちも口の上手なのが沢山にいますます常客はふえる。一方蠅のうなる部屋窓辺に寄って、呼ぶ声に応える様子もない「奇妙な女」、客の絶えた宿屋の女主人は、宿屋の衰えの原因の一つに自分をも数える最も陰気な語り手である。「私はべっ

びんじゃありませんし、熱病持ちですし、二人の娘も死んでしまいましたし、……」⁴⁰このような宿屋に客がよりつかなくなつたばかりではない。主人のジョゼまでも、気晴しに向いの宿屋へ飲みに行き、喧騒を圧するすばらしい歌声を響かせているのである。「——だって旦那さま、どうにも仕方がないじゃありませんか？ 男は皆そんなものです。男はめめめ泣くのを見るのが嫌いです。ところが私はというと、娘たちが死んでからこっちは、いつも泣いてばかりいます。」もし冒頭の炎暑の街道の描写がなかったならば、これが南仏を舞台とするものとは恐らく誰も思わないであらう。

コルシカ島の沖合で起つた同一の部隊の不運な二度の遭難を物語る「セミヤント号の最後」は「恐ろしい一篇の海洋物語」と作者が言う内容の悲惨さのために目立たないけれども、語り手の交代、いわばリレーの形式をとつていくことがわかる。遭難者六百人の墓地へ作者を案内し事件を紹介するのは税関の船（作者はこれに同乗している）のリョネツチ船長である。老羊飼いが事件の目撃者として一時話に加わる。船長が再び話を継いで更に詳しい経過と結末を物語る。作者に残された部分もある。それは一名の生存者もないこの遭難事故の断末魔の船内の情景を、浜に打上げられた死者達の中に見出されたという正装した艦長と首に襟垂（スリ）を懸けた従軍司祭の姿から再構成することである。ところで濃霧と強風の中で暗礁に激突し沈没する船の物すごい響を聞き、浜辺でおびただしい死骸を発見した小島の老羊飼いは、岩の上の焚火のそばへおぼろげに現れる。事件のショックの結果（語り）の能力をほとんど有しないこの語り手は、癩病の老人で、壊血病に冒されて厚く突き出た病気の唇を指で持ち上げながら、当日見聞きしたことを話すのである。「ものをずい分言つたのにくたびれてしまつて羊飼は坐り込んだ。」そこで船長が再び言葉を続ける。作者が接した二人の語り手は、職業上この事件を語るにふさわしい船長と、雰囲気上、この陰惨な物語の語り手であると同時に一部でもあるような老羊飼とである必要があつたのである。

職業上の義務その他の拘束の中に暮す人々をドーデはしばしば題材とするが、コルシカ島サンギネールの灯台守の生活もその一つである。冬のある晩、夕食中の灯台守の相棒が急死する。死体とともに過ぎねばならない夜は遠慮なくやって来る。と同時に灯室管理の仕事も始まるのである。「しょっちゅう誰かが階段のところでわしを呼んでいるような気がしました。」これも確かに職業に結びついた恐怖物語であろう。だが、沿岸航行に日々を過す税関吏とその家族の生活は職業上の宿命を描いて「風車小屋便り」の暗い作品群の一角を形作っている。作者にとつての「陰惨な航海」にもこれら職業人は誰一人不平を鳴らしはしない。「どんなにひどい悪天候の日でも、私の見た船員たちは、いつも同じように穏かで、同じように上機嫌だった。だがそうはいうものの、これら税関水夫たちの生活は、なんと悲惨なものだったろう。」⁽⁴⁾中でも一番陽気な水夫のパロンボはどんな荒天の時にも上機嫌で歌うことをやめない。ところが雨風の激しいある日、その歌が聞こえなくなる。肋膜炎にかかって寝込んだのである。歯の根も合わず、熱のためにふるえているこの水夫は、風土の悪意を絶えず受ける厳しい職業環境を象徴するものである。「鉛色のこの広い空、たえず波をかぶるこの小船、雨に濡れて海豹の皮膚のように光る古いゴム外套にくるまって、転がっているこのかわいそうな熱病患者、私は今までにこれ以上痛ましい情景は見ることがない。」この男がかつぎ込まれた税関の監視小屋とそこに住む税関監守の一家の生活も劣らず不健康な惨めさを漂わせる。「彼らはみな憔悴した黄色い顔付をしていて、大きく見開いた眼のまわりには熱のために隈ができていた。乳呑児を抱いたまだ若い母親は、私たちに話をしながら寒気さむけでふるえていた。——「ここは恐るべき職場なんですよ」と監督官が小声で私に告げた。「われわれは二年目ごとに監視人を交替させねばならないのです。マラリヤにやられてしまうので……」

これらの人々はなるほど地位低く、貧しい人々ではあるけれど、元来の病弱者ではもちろんない。寝台に見舞う作者に感謝して差し出された重病のパロンボの手は「びらびらした、しかも火の中から取り出した煉瓦（これで脇腹を

暖めてやっている―筆者）のように熱い、大きい頑丈な手であった。」職業上の拘束と風土という二重の悪意の作用で、この頑健な身体すら蝕まれて行く。森の池に面した不健康な監視人小屋を政府からあてがわれ、二人の娘と妻を悪性の熱病で次々に亡くし、残った一人の娘、発熱を繰り返し、木の葉のように軽い少女を背負って森の道に現れる「サフォ」中の森番。これとほとんど同じ性格の描写を見て取ることができる。それは自然の不健康な側面に専らしばりつけられた職業の条件を描く点、および職業の環境がほとんど同時に家族全員の生活環境である点である。解雇されたことを延々長時間に亘って隠し続けるパリの銀行員ジョワイユーズ氏とその幸福家庭のような、職業と家庭の都合よい分離はここにはないのであるから。これらはいずれも自然の中で暮す人々を描いてはいるけれども、その非ルソー的な負の側面を示したことになる。地位と職業の描写に重要な位置を占めるこれらの病気は、彼の作品の中にあつて南仏を除外することはないのである。そして南仏の風土病とそれに悩む人々が描かれる時、「別の南仏」と呼ばれるにふさわしいものの存在が示されるのである。

死の前年に書いた「アルラタンの宝」は、作者が常に回帰する愛欲からの脱出の主題を再びとり上げたものである。「アルルの女」に始まるこの主題は「サフォ」を経て「アルラタンの宝」となる息の長さ、あるいは抜きがたさを持つていたのであろう。女優マドレーヌ・オジェへの愛欲と嫉妬の苦しみを断つべく、カマルグの湿原へ猟人として籠りに来たダンジュは、奇怪な放牧馬番人がかつてのマドレーヌの行きずりの恋の相手であり、かつ彼女の半裸体の写真を贈られていることを知ったがために再び心を乱される。しかしかえってこの事実によって今度は決定的に愛欲に終止符を打つに至る。だが、この作品にはかつての主題が再び姿を表わしているばかりではない。文壇登場時代の一風土描写を再使用している点からも、作者の作品経歴の中に古い根を有する作品なのである。

「アルラタンの宝」の背景は「カマルグにて」の次の一節をほとんど変更なく今一度採り上げたものに外ならな

い。「實際、夏が来て、沼が乾上ってしまった、「運河」の白い泥土が猛暑のために亀裂を生じると、鳥は本当に住めるようなところではないのだ。私はかつて一度、八月に、野鴨を射ちに来て、それを目撃したことがある。そうして私には、この炎熱に焼かれた風景の物悲しくも残酷な眺めがいつまでも忘れられないであろう。水の少なくなった沼はところどころ大きな醸造桶のように太陽を浴びて湯気を立てており、その底には生き残りのいもりや蜘蛛や水蠅どもが湿った隅を探してはうようよとうごめいていた。ペストのような毒気、重苦しくたゞよう瘴気の霧が渦巻いていて、無数の蚊柱がその瘴気をいやが上にも濃くしていた。監視人のところでは、家じゅうの者が悪寒に顫え、一人残らず熱病に罹っている。黄色い引きつった顔に、隈のある眼ばかりぎよろぎよろ光らせて、三カ月の間、照りはしても寒気を追い払ってはくれない苛酷な烈日の下に、いやでも物憂い身体を引きずらねばならないこれらの不幸な人々は、見るからに哀れであった。……こうしたカマルグの狩猟監視人の生活は本当に悲惨でつらいものである！」

パリから来たダンジュを迎えた旧知の狩猟監視人はリユーマチを病み、顔をしかめないでは脚絆がはけない。彼の顔はやせ細り、肌が荒れ、ダンジュが「シャロン、お前病気だったのか？」とたずねたほどである。妻のことが全く話に出ないのは、年中直らぬ熱病に、季節外の冬にも悩まされ、顔が変ってしまったのである。美人だった妻が醜くなったために、シャロンは長く苦しめられて来た嫉妬からやっとな解放されて内心満足なのではあるが。かつてダンジュの踊の相手もした仲のこのナイスは、ダンジュを家に迎えても、決してこちらを向こうとしな。彼女も容姿を異常なまでに重大視するアルル地方の女なのである。狭い小屋の中で、ダンジュをさけながら一日を過ごした後、やっと彼に見せた顔は、熱のために細くなり、引きつり、異様に大きな眼を黒い隈がふち取っている。そして昔の彼女を知るダンジュが顔を見ないでくれることを彼女は強く願うのであった。放牧牛監視の二人の男が騎乗のまま、三又槍を地面につき、悪感のふるえが乗馬に伝わるほどにわなわなしているのも見られる。そして彼

らの熱病を藁草で直すと信じられ、かつ猥画を含む蒐集品でも知られているのが、女達の恐れるアルラタンであり、彼の蒐集品が土地で有名な「アルラタンの宝」なのである。

この作品は愛欲をめぐる作者固有の主題、身分間のへだたり、迷信、半野生の孤独な生活などから形成された極めてドードの性格の濃い中篇小説であるといえよう。そして陽光とミストラルと遠い海鳴りの中で悪性の熱病に傷めつけられる野天生活の人々を登場人物とすることによって、この作品はまた彼の南仏作品群の中で分類の困難な異色のものとなっている。「二つの南仏がある。町人の南仏と農民の南仏と。一方は滑稽で他方は美しい。「タルタラン」と「アルルの女」は、ずい分異なるこれら二つの南仏の見本なのだ。」という作者自身の分類において、この南仏はやはり「美しい」南仏に属するのであろうか。「タルタラン」の南仏とも「アルルの女」のそれとも正確には同じでない一側面をもつ南仏がやはりそこには見られているものと思うべきであらう。しかし、南仏人の病苦とその不安は、自身一人の離郷者だったこの作家の、異境での経験と印象を得る時、より独自の描写を生み出しているように思われるのである。次章においてはその点について考察したい。

III

「パリでは、オレンジは、まるで木の下に落ちていたのを拾われた果物といったような、なまけない様子をしている。」「という「オレンジ」の一節に作者は、南国生まれのものたちが北の土地で迎える冬の悲哀をもいくらかは象徴させているであらう。バレアレス諸島、サルジニヤ島、コルシカ島、アルジェリヤなどの原産地の青い空と地中海の温暖な空気の中では、ニスを塗ったような葉の茂みの中で、色ガラスで出来たもののように輝いていたオレンジの衰

弱した、所を得ぬ姿がここに描かれている。この南国生まれの果物と同じく、パリへ上った南仏人にも身心の衰弱が待ち構えてはいないか。これはまた二月末の寒空の下をパリへ出て来たプチ・ショールドローデの実感でもあった。「なんとという旅行だったろう！三十年経った今日、そのことを思い出すだけでも、私はまだ脚が氷の足枷で締めつけられるように感じ、胃の痙攣に襲われる。二日間、三等の客車内で、夏の薄着のまま、寒さにふるえていたのだ！」⁶⁴息子のパリでの旗上げのためとあって、いやいやながらパリ住いを強いられた太鼓手ヴァルマジュールの父にとって、なお更辛い現実である。「パリへ着いた彼が見出したものは、寒さと不如意と雨であった。」⁶⁵そこで彼は「この年の人間をこんなに遠いシベリヤまで連れて来て、寒さと生活苦でくたばらせるのを哀れとは思わねえか」と聞こえよがしに言うのである。パリには病人が多く、パリ特有の病人たちさえいるのである。アイルランド人のいかさま医師ジェンキンスの、立派な邸宅に住む患者達がそうである。しかし彼らは無謀と無節制から肉体は死につつあるにも拘わらず、この生活をあくまで続けようがために、この医師の調査する危険な砒素剤を連用する病人達である。「アイルランド人のドクトルの患者たちは本当の病人ではなかった。病院なら彼らを断つたに違いない。」そして南国生まれの生命は、これらの病人達とは異なり、また治療薬も見出せぬまま、より確実に危機に陥る。

恋人を追って北の国へやって来た植民地生まれの白人の少女は、島の人たちが、「発つのはやめなさい、大陸は寒い……冬になったら死んでしまおうよ。」と言ったのを信じなかったのである。北国の夏はやがて終りを告げ、寒さといえは凍り菓子の冷たさしか知らない南の島育ちの少女にとって最初で最後の冬がやって来る。「ある朝、目がさめた時、少女は激しい寒気を感じた。太陽が姿を消し、夜のあいだに地面に近づいたかと思える暗い低い空から、まるで綿の木の下にいるように、白いびろうどのようなものが、静かに、ひらひらと舞い落ちていた……冬だ！冬が来たのだ！」⁶⁶そして終日火のそばに身をすばめて過ごす少女のかたわらで、籠一杯につれて来たはちすずめ達は、もう

さえずらなくなり、みどり色の小さな翼をもう動かさなくなる。「毎朝、死んだはずが籠の中から拾われた。やがて、もう二羽きりになってしまった。片すみにくつき合つて緑の羽を逆立てた二つの羽毛の塊りになってしまった……」やがて少女もやつれ果て、悲歎にくれて病の床につく。そして手鏡の中に映る暖炉の火に故郷の陽光をしのびながら死んで行く。(「鏡」)

ドードの作品には様々の形の不適応が語られているが、彼の感傷性を最も自然に呼び起こしたのは、南の国に生まれ育つたものの達の北国の冬への不適応であろう。だがパリでの真の、より深い不適応はむしろドードにとつてパリあるいは大都會の酷薄から来るものである。南フランスで群集を熱狂させ、夜鶯と張り合う名太鼓手ヴァルマジュールのパリでの敗亡にそれは示されている。南の島の少女が北国の寒冷に亡ぼされたようにパリの雨と霧で衰弱死する南仏人はないが、パリの酷薄によつて亡ぶ南仏人は作品の中に数多い。従つてプチ・ショーズ即ちダニエルが汽車でパリへ着いた時、「あゝ残忍な大都會よ。プチ・ショーズがお前の事を怖れたのはもつともだった！」⁴⁰という感想が生じるのである。パリによつて亡ぼされたゴリオ老に代つて新手としてパリに対決を挑む青年ラスティニャックを思わせる人物はドードの作品には求め難い。

ダニエルの母親も、またナバブ即ちジャンスレーの母親も、ともにパリで二人の息子の一人を病の手に奪われ、他の一人を重病人として我が手に返されるといふ共通の運命を負っている。ナバブが買ひ入れた壮麗な城館の庭には無気力な一人の散歩者が姿を現わす。顔には血の気がなく、年齢の判断もつけにくい。この男は決して人に話しかけることはない。疲れを感じるとちいさな叫び声を上げ、つき添いの下男が石段などに腰をかけさせる。するとその場所に口をだらしなくあけて幾時間も坐っている。「この男は「長男」、つまりベルナルの兄、ジャンスレー父母の秘蔵子であつた。彼こそは美であり、知性であり、釘売りの家族の希望であつた。」⁴¹南フランスの伝統を守つて大切に

されたこの長男坊は多くの犠牲を払ってパリへ送られたが「パリは——十年間この南国の輝かしい布切をその大釜のなかで打ち、ひねりまわし、搾って、硫酸塩のなかで焼きこがし、泥の中に転がした上で——このぼろと残骸の姿で、無気力な麻痺患者にして帰したのだった。」この男は騎兵連隊相手の曖昧宿を経営し、自らも恐らく病毒に脳を冒された結果、廃人と化して帰郷したのである。「その顔では、ひげが肉体の全部の生気を吸いとって、驚くべき活気でのびていた。」^㉑父親は真相を知って絶望のあまり死んでしまい、一方弟のジャンスーレは、敵対者に格好の武器を提供することになる。悪意ある人々は、彼の兄の恥ずべき経歴を故意に混同し、彼を散々に苦しめる。彼は外地金の身からパリの超一流の名士になりたいという望みもむなしく、起死回生の代議士当選も棒に振り、再起不能の状態を脱せぬまま、脳溢血を発して死亡する。従って、絶望し憔悴した息子ベルナルを見て彼の母親が次のように思うのは当然なのである。「今は、パリは彼女をおびえさせていた。彼女は自分の息子を南フランスの人の知らぬ田舎に連れて行って、長男と彼の二人の看病をしたいとねがっているのであった。」^㉒そしてこの場合「二人ともに大都会がつくった病人であった。」と作者が述べる時、それは病者への諭えなどでは少しもないのである。ただこの作者にあつては、人生における敗退はしばしば病気によって伴われ、ほとんど類比的な関係を感じさせはするのである。

三人の息子を持つダニエル・ブチ・シヨーズの母親も、長男の病死に遭うが、これが母親としての悲劇の最後ではなかった。次男——余計な夢は全て可愛い弟に譲り渡して、没落の工業家一家を再興するため、また弟を文壇に出すため身を粉にする苦勞人——のジャックも、過勞のためと、弟の墮落を食い止めた安心感から肺炎を悪化させて急死する。一方ダニエルも疲勞と兄の死への自責の念とから、葬儀が終るのも待たず病に倒れる。三週間の高熱と昏睡状態が続いた後、この瀕死の病人は奇跡的にも「死にぞこない」として回復へ進み始める。二十年間の貧乏と苦勞に加えて三人の息子を本当に三人とも失ったかも知れないエーセット夫人は、眼を泣き潰して失明状態に陥る。サフォ

の愛人ジャンのバリでの生活を非難する叔母ディヴォンヌのいささか偏狭な反都会主義の叫びは、少なくともドードの作品中の多数の地方女性を代表するものとはいえよう。「ああ、バリ奴が！」と、ディヴォンヌは、地方の人々がありとあらゆる忿怒を浴びせかけるあの敵の方に、拳をあげながら言った……「バリ奴が！あたし達がバリに与えたものを、どんなにして返して来ることか！」⁽⁸⁾

幻の獅子を求める獵人タルタランの彷徨が愚かな誤射（僧侶が寄附金を集めるのを手伝う大人しい獅子をタルタランは射殺する）によって終りを告げるのと同じく、南仏からパリへ上った正統王朝派エリゼー・メローの大時代的な君主教育も、悲惨な暴発事故によって突如破局を迎える。真面目に王家再興を目論む王妃の目を盗んで亡命の王は歓楽追求に余念がない。無気力な王に代って王朝最後の望みがかけられているのは虚弱な一人っ子の王子である。この王子に帝王学を叩き込むべく招かれたのが、ラテン区のかつての名物男、失意の王党理論家エリゼー・メローであった。王が愚かな恋愛事件から反攻軍の全滅を招いた責任をとって退位した後、王子は健気にも王たる道を学ぼうと振立立つ。エリゼー・メローが自ら引き起こした不幸な暴発事件は、この大切な王子を失明させ、自己の夢にも、また同じほど空しい亡命の王家の夢にもとどめを刺す。そして人生の破綻を象徴するかのようになりエリゼー・メローは略血して病の床に倒れる。このエリゼー・メローもたしかに南仏出身の誇大妄想家として描かれてはいるけれども、類型としては、タルタランやニュー・ルメスタンのような生粋のドード的南仏人に属するものではない。むしろ才能と青春を空しく浪費して奇怪な末路をたどる「黄金の脳みそを持った男」、あるいはパリの芸術家生活の誘惑と陰惨な宿命を、役所通いの請願者に身を落とした毒舌評論家の姿に描いた「ピクシュエーの紙入れ」の主人公に近いものである。ただドードには南仏衰亡史の記述者たる一面がある。風車、駅馬車、定期市の衰亡を語る時、いわば叙事と抒情が調和しているのを見ることが出来よう。それと同じく、時代錯誤的で頑固な南仏王党主義の挽歌を「亡命の王達」

のエリゼー・メローに見ることが出来はしないであろうか。

IV

パリの寒冷、都市生活の中での破綻、挫折は、病気によってある程度視覚化もされているといつてよいだろうが、それはまた雨と霧の恒常的な描写によつても視覚化される。そしてこの悪天候の不愉快は最も端的にドーデ好みの南北対比を示すものでもあろう。「私が「プチ・シヨーズ」の中に、かなり忠実に記し得たと思うものは、リヨンの霧の中に埋もれたある南方の家族の無聊、流亡、困窮の姿であり、即ちある地方から他の地方へと移住したことによる気候、慣習、言語などの変化、それに容易に往き来できるとはいつても、取り除くことの出来ない故郷との間の精神的なへだたりなどである。」⁸⁸と作者は述べるが、雨と霧は南仏人たる作者および作中人物にとつて罹病の不安をもたらず第一の条件であらう。「リヨンは少年時代の思い出である。だが、このリヨンという名を書きつけただけで、私の心はしめつけられる。」と作者が言う時、窮乏の生活とともに、それを包む霧の町を思い起こして言うのだと思つてもよいであらう。エーセット家の忠実なアンヌー婆やも、リヨンの霧で身体をこわし、泣く泣く南へ帰つて行く。作者がパリの雨を描く時も、もちろん快い環境の描写ではない。リヨンからパリへ出て、自活の道を見出し、長い間の泣きぐせもすっかり抜けた兄ジャックからの第一便はさつそくに雨のことを話題にしてこれをほめる。「あゝ、愛するダニエルよ！パリって美しい都だねえ！ここでは——少くとも——始終霧ばかり降っていない。そりゃ雨は時々降る。だがそいつは陽気な小雨で薄日がさしているという、よそでは見たこともない雨なのだよ。」⁸⁹病気などしたことのないこのジャックが気苦勞と過勞から病死し、十二月のある日、彼の棺がモンマルトルの墓地へ向う時もパ

リは雨である。「雨が降る！　雨が降る！　おゝ、何という雨だ！」^㉑ドードの作品には葬儀の場面が多いといわれる。^㉒二作続けて葬儀の場面が入ることになるのでやむを得ず遠慮した場合さえあるという。このドード好みの場面ともいふべき〈葬儀〉にもう一つの好みの描写対象である〈雨〉が組み合わされて出来た典型的場面といつてもよいであろう。

テュニスで珊瑚の取引をするベルギー人金満家の娘であるジャンスレー夫人もまたパリへ出て来る南国育ちの人である。阿片入り煙草とバラのジャムとフランドル人の血の愚鈍と東洋的な怠惰の習慣から知性が空洞化した白い肥満体となり、真珠の王冠をかぶり、寝台に横になって暮らしていた女性である。ジャンスレーが、不和となったテュニス新国王の侮辱に報復するため、あてつけの派手な離国を思い立った時、他の生活が不可能なこの女性もパリへ来なければならなくなったのである。彼女の側からすれば大変な犠牲を払ったことになる。「パリに着いたその時から、生まれつきの不精は、黄色い冷たい霧と降りつづく雨とで起こったノスタルジーでいよいよ激しくなつて、幾日ものあいだ彼女は床からさえ起き上がらず、子供のように大声で泣き叫びながら、自分を死なすために人が自分をパリに連れて来たのだと言つた。」^㉓彼女はヒステリーを起こし、人を寄せつけず、窓を閉めたきりで叫びつづける。「パリの空を変えること」という不可能事以外、彼女を慰めることはできないのである。

ドードの作品の気楽な誇張の世界で、リヨンと並び雨と霧での憎まれ役はスイスではないかと思われる。リギ山の御来迎はベデカの嘘に見えて来る。タルタランのアルペン・ストックは雨傘である方がふさわしい。「リギ・クルムに雪を残して下山して来ると、下界の湖水の上は相変わらず雨であった。こまかい、目の詰んだ、はつきりしない、水蒸気のような雨で、その向うに山々が層をなして遠く、雲のようにぼんやり霞んでいた。」^㉔船上の観光客は防寒外套やゴム外套を着こみ、喋らず、動きもしない。「栈橋に船が寄ると、船客が降りたり、乗ったりするが、誰も泥だら

けで、びしょ濡れで、黙りこくっている。」タルタランは「この人達はみんな楽しみのために旅行している」のであることが納得できない。「タルタラン」は元来幻滅を滑稽化して描くのがその意図であるが、重装備のタルタランが山頂に見出した豪華なホテルよりも更に徹底してタルタランの登山の幻滅性を印象づけるのがこの雨である。同じ雨でも、ナバブのテュニス王歓迎会の大失敗に追い打ちをかける南仏の豪雨とは大変なちがひなのである。

しかし、タルタランは、単身好んでアルプス登山を試みているのであるから、山が近代化しているようだが、降雨に見舞われようが、個人の無害な幻滅以上のものを生み出しはしない。この南仏人はたしかに雨の異境にあるけれども、その土地との結びつきは稀薄であろう。だが、「タラスコン港」への移民達を待っていた連日の豪雨は、〈地主〉たる移民達がこの島に執着する限り逃れることはできない。

ベルギー人の山師、自称モンス公爵にだまされたタルタランが、新タラスコンたる〈タラスコン港〉を建設すべく土地購入と移住の宣伝を行った時、「楽園的風土、赤道附近にも拘わらず非常に温和な大洋州的気候、二十五度と二十八度の間、二三度の上下のみ」とうたった南の島は、有毒な動物は全くおらず、土人はみんな菜食人のはずであった。これらの情報は全て公爵の出まかせであった上に、そこは一年の大半が雨に閉される南仏人にとっての地獄であった。食人種の手を逃れた先発の入植民の一人は入港した移民達に報告する。「雨が降るって？——降りますとも！リヨンよりも、もっと……スイスよりも……一年のうち十カ月間は雨ですよ。」⁸⁸原住民との交易用にと大量に輸送して来た洋傘が偶然大いに役に立つ。「降り通しの雨の上に、澱み沼があつて、熱病だ、マラリヤだというわけで、墓地だけは、早くも開設となる。身体の病氣にかたて加えて、倦怠とへふさぎの虫だ。最もやる気のある者でも働く元氣さえなくなり、水浸しのここの気候にやられて、身体はすっかりなまくらになってしまった。」英国の軍艦が砲弾と武装した水兵を送り込み、島の所屬を明らかにするに及んで、この逆ユートピアはやつと終末を迎える。そして

この逆ユートピアの「逆」を示す主たる特徴が降雨であることは次の文に示されている。「帰国の」航海が二日目に入つて、島が視界から消え失せるとさつそく、青空が見え出した。まるであの島はこの群島の真中にひとりぼつんと孤立した、霧と雨の貯蔵庫でもあったかのようだ。」⁸⁰

「タラスコン港」は写実とは無縁の作品ではあるけれども、その描写に何らかの誇張した点があるとすれば、あくまで移民の故郷南仏との対比が誇張されたものであるといえよう。ただ、誇張にはおのずから他の誇張が対抗する。倦怠と陽光への郷愁からこの植民地にどれほど病人が現れようが、タラスコン港の保健部長は病人に「おいしいにんにく入りスープを一杯」飲むように処方することによって救済を試みる。「全身が腫れ上がつて、物も言えず、息も絶え絶えで、既にもう、坊さんや公証人まで呼び寄せている人たちがいるとする。ところが、小さな茶碗に三つばかりのにんにく片と三さじの上等なオリヴ油を入れ、その上に焼パンを浮かしたにんにく入りスープが来ると、もう、話もできない人たちが口を利き始めるのである。「うーむ！こりゃいい香りだ……」ただ、匂いを嗅いただけで、病人は立ちどころに回復する。」⁸¹

この味覚的ノスタルジイの精髓から作られた特効薬は、ニュー・ルメスタンも参加するパリの「アイヨリの会」に姿をかえて描かれてもいる。「このアイヨリの会の目的は、月に一度、パリ在住の全南仏人たちに、南仏名物アイユにく入りの料理を提供し、故国の香り、故国のなまりを忘れ去ることを防ぐというものである。」⁸² 離郷した南仏人は雨と霧の中で、身体を、または心をいかに冒されようとも、それがドーデの作中人物である限り、このような味覚的神秘主義に頼つて、病気の誇張された部分に対し、釣合いを保つのであるとはいえないであろうか。

病いと死に至るいかに多くの不幸をドーデの作中人物が忍ばねばならないとしても、南仏出身の作中人物たちは、更にもう少し余分の不幸や病苦を経験するのである。彼らは（作者自身も含めて）空想の過多によって楽しむばかりではない。そのためにひどく苦しむのでもある。故郷の請願者たちに空約束を連発するニユマ・ルメスタンを彼の妻がたしなめた時、南仏人同士の間では約束の何たるかがわかつているのだとこの代議士は言うのである。「彼らはそういう事柄を話題にするだけでよいのだ。それで楽しいのだし、空想は機嫌よく旅に出る。どうしてこの楽しみを取り上げてやってよいものかね？」だがその南仏人たちは、不幸や病苦の空想だけを選んで抑止するわけには行かない。彼等はしばしば大げさな不幸想像家としても描かれる。もちろん、死や不幸の心配は大げさであればあるほどエゴイズムの醜態か滑稽に近づきもするから、それら不幸想像家の大半はドーデの滑稽人物であろう。だが、エゴイズト、無責任な快樂主義者、妄想家たちこそ、作者が、自己をその中心点からほど遠からぬ所に見つつ、親しく想像し得た人物像であることも推測できる。絶えず涙にくれているダニエルの兄、泣き虫ジャックも恐らく南仏人のこうした不幸拡大症を生理的事大主義として表わしたものであろう。

この不幸が自分のこととなると、妄想は更に重大となる。タルランが射殺した獅子は運悪く軍所属地に倒れ、訴えられたタルランは軍法会議にかけられそうになる。「そして軍法会議と聞いただけで、感受性豊かなタラスコンびとは、もう城壁の下で銃殺されることや、土牢の底でみじめに暮らしているところなどを目に浮かべる。」従って彼らドーデの南仏人にとっては罹病の恐怖も甚だ大きく、そのために言葉とその意味する内容が均衡を失いさえず

る。アルプスの羚羊カモシカから豪雨と雷鳴の中を宿へ帰ったタルタランは真青になって「こりや、やられたらしいぞ……」
と言ひ出す。「「やられる」というのは漠然として簡潔なうちに不気味な内容を持つお国言葉で、ペスト、コレラ、
黄熱病、黒と名のつくやつ、黄色と名のつくやつ、急性で激しいやつ、とにかくタラスコンびとがちよつと気分が悪
くてもさあ罹つたと考えるあらゆる病気を意味するものである。」⁸⁸このような「気で病む男」たちが多数いるところ
から、ドーデは「病人の土地、南仏」⁸⁹と言つたのであろう。

このように余分にまで不幸や病苦を経験する一方において、それらを何とか予防し、避けようとする極めて現実的
な態度も彼らは持っている。これは直ちに虚栄的英雄模倣と矛盾する。しかし、冒険精神の欠除もあろうが、彼ら英
雄模倣家は、巨人であることによつて現実の人的規模を無視できるラブレールの主人公でもないし、また現実の変形
使用が本領であるミュンヒハウゼン卿的冒険家でもないから、いづれも過度に現実の厳しさを考慮する。従つてタル
タランの中にいるドン・キホーテとサンチョ・パンザは絶えず口論となる。キホーテ・タルタランがアフリカ行を決
定すれば、サンチョ・タルタランは難船、リユーマチ、脳炎、赤痢、ペスト、象皮病などを並べ立てる。前者が武器
を呼び求めれば後者は肌着やチョッキや帽子の準備をうながすことになる。そこで本物の冒険的精神との出会いも一
つの笑劇となる。シベリヤから脱走して肺患となり、スイスで重症の身を養っているロシア虚無黨員ボリスの笑顔
も、彼の妹で將軍射殺犯のソニヤの誘ひ、猛獣でなく暴君を射殺しに來いという誘ひも、さらに、ザイルでつながつ
た全員を道連れにして氷壁から身を躍らせたがるスウェーデン人学生オットー君の自殺願望も、アルプス登山を計画
しただけで夜毎転落事故の悪夢にうなされるタルタランには無縁なのである。従つてニュー・ルメスタンが湯治場の
公園で名医のブシュロー、健康人の中に潜んだ病巣を見抜くと評判のブシュローに出会う場面は一つの典型である。
「なり振るかまわず生命に愛着しているすべての南仏人と同様、病いと死の前では一個の腰抜けであるニューマは、も

しや自分の赤ら顔の中に、遠からぬ死の前兆でも読み取られはせぬかと心配で、この恐るべきドクトルから目をそらせ、まともに相手の顔を見ることもできないのであった。」⁸⁹

しかし、ドーデの作品に病氣、病者が描かれた時、それは常に、ある風土の病的で不健康な側面を写したものであり、作中人物の虚弱または柔弱を示すばかりなのであろうか。少なくとも南仏と南仏人については、こうした一方の理解を妨げる要素があるように思われる。彼は南仏の風土を専ら快適で穏和なものとして述べてはいないからである。故郷の土地を一般的な意味で美化してはいない。「私の故郷の町（ニーム）はとんでもない所だといわざるを得ない。ミストラルと太陽に焼かれ、乾上がった鯨の骸骨といったところだ。」⁹⁰友人の祖父母への代役訪問を託されてしぶしぶ風車小屋から出かけて行く作者はまた言っている。「ミストラルは吹きすぎだし、太陽は照りすぎ。正真正銘のプロヴァンス日和だ。」⁹¹ジャン・ゴッサンがせっかく故郷に帰って身心の回復を計っているところへファニーからの愛の手紙が届く。彼の心は乱され、彼の眼に急にうとましく見えた故郷。「ジャンは風が荒く、飲む水がにがいと思った。」⁹²夢のさめたジャンが見てとつたこの南仏に幾分かの真実があるのである。

悪意ある自然とはいえないが、少なくとも荒々しくて不親切ではある自然、この中にしかし南仏の平常の生活は描かれている。そしてその〈平常〉の中に、幾分かの病氣もまた含まれているのだと思わねばならない。アプス（これは架空の町だが他の町と少しも変わらない）の古代ローマの闘技場で七月のある日曜日、共進会に集まって名物代議士ニユマ・ルメスタンの現れるのを待っている大群集、南部地方紙の誇張的計算で五万の群集は、日盛りの野天の祭りにつきものの、あらゆる危険を冒して偉大なニユマを待つのである。「焼けた石畳の上に立ち、殺人的な太陽の目をやられるほど照らされ、埃の臭いのする熱気と砂ぼこりを吸い、眼炎、日射病、悪性熱、その他あらゆる危険と苦痛を冒して二時間もの間」⁹³待ちながら、彼らは騒々しくひしめき合う。雨と霧のパリにおける都市生活を写す時、

何らかの病苦の描写が抜き難いとするなら、南仏の風土を写すのにもやはり何らかの疾患描写は伴うのである。ただ、ここに描かれるのは風土の病的な側面でもないし、またある人間の弱さでもない。むしろ半野天的な南仏の生活のただ平凡な現実であろう。従って、熱病の痕を、やつれて引きつった顔にとどめるカマルグの狩猟監視人に「お前病気があったのかい？」とパリからの客がたずねた時、「わしが病気？とんでもねえ」⁴⁸とその人物は答えるのである。作者が長い間苦しめられた自己の病苦を書き留めようとした時と、このような半ば苦痛に近い、南仏の自然の中の生活を描写する時は、彼の病氣描写が感傷性の疑いをかけられる理由は全くないのである。

- 註
- (1) Alphonse Daudet: *Œuvres Complètes illustrées*, Edition Ne Variatur. Tome VIII p. xi.
 - (2) Charles Mantoux: *Alphonse Daudet et la souffrance humaine*, La Pensée Universelle, Paris. p. 51.
 - (3) op. cit. p. 37.
 - (4) op. cit. p. 37.
 - (5) O.C. Tome V p. 51.
 - (6) O.C. Tome III p. 76.
 - (7) Charles Mantoux: op. cit. p. 51.
 - (8) O.C. Tome IV p. iv.
 - (9) O.C. Tome III p. 4.
 - (10) O.C. Tome IIIp. 24.
 - (11) O.C. Tome III p. 95.
 - (12) O.C. Tome VII p. 117.
 - (13) O.C. Tome VII p. 163.
 - (14) O.C. Tome XVII p. 1.

- ⑮ O.C. Tome XII p. 75.
 ⑯ O.C. Tome V p. 163.
 ⑰ O.C. Tome II p. 111.
 ⑱ O.C. Tome X p. 150.
 ⑲ O.C. Tome X p. 155.
 ⑳ O.C. Tome X p. 368.
 ㉑ O.C. Tome XIV p. 72.
 ㉒ O.C. Tome II p. v.
 ㉓ O.C. Tome II p. 82.
 ㉔ O.C. Tome II p. 240.
 ㉕ Charles Mantoux: *op. cit.*, p. 69.
 ㉖ O.C. Tome X p. 97.
 ㉗ O.C. Tome XV p. 35.
 ㉘ O.C. Tome XIX p. 56.
 ㉙ O.C. Tome XIX p. 108.
 ㉚ O.C. Tome XIX p. 83.
 ㉛ O.C. Tome XII p. 205.
 ㉜ O.C. Tome IV p. 124.
 ㉝ O.C. Tome XV p. 88.
 ㉞ O.C. Tome XXIV p. 6.
 ㉟ O.C. Tome XII p. 142.
 ㊱ O.C. Tome XXI (Premier Voyage...) p. 6.
 ㊲ O.C. Tome III p. 59.

ドレーデの南仏と南仏人

- ㉔ O.C. Tome XIV p. 68.
- ㉕ O.C. Tome XII p. 1.
- ㉖ O.C. Tome XXIV p. 7.